

## 沖縄県下の米軍作製地図について

島袋 伸三（琉球大学名誉教授）

1999年11月に「大正・昭和琉球諸島地形図集成」がお茶の水女子大学所蔵地図を中心にして直接復刻され柏書房から出版された。高度な技術を駆使して復刻された地形図は原図とみまちがうほどのすばらしい図幅の出来ばえである。以前に、樺太・朝鮮・満州・台湾まで網羅した1/5万地形図の復刻で、沖縄県の地形図が欠落した出版物を購入してがっかりした記憶がある。おまけに、今回の柏書房出版の地形図集成には別冊に（「大正・昭和琉球諸島地形図集成」解題）を編み、4名の研究者によりきわめて懇切丁寧な解説がなされている。

筆者はかつて「沖縄の地形図」の小論文を執筆したことがある。それは、南島地名研究センター「南島の地名」第3集、1988年、78-86頁に掲載されている。周知のように陸地測量部作製の地形図は製作されるや「軍事秘密」となり、公共において活用されることなく多くの県民はその存在さえ知るよしもなかった。仲松弥秀は沖縄県立第二中学校で教鞭をとっている際に、県庁の農地課が1/5万地形図のワンセットを所持していたことを記憶されている。本人の地理学研究的論文において地形図は全く利用されていない。1937年に東京文理科大学の卒業論文を提出した赤嶺康成の「沖縄県における甘蔗栽培及び含密糖生産に関する地理学的研究」の内容を見ると当時の地形図を利用した地形跡がみられない。分布図のなかには縮尺を欠いているものがみられる状態でその表現は当時のレベルからしても稚拙としかいいようのない内容である。琉球大学で地理学教室を創設した赤嶺教授は沖縄の掛地図作製を手がけた最初の地理学者であり、他方では地図の収集・整理・保管に熱意を注いでおられた。

沖縄県における陸上戦中に、地図にまつわる哀しい事件が惹起したことは現在沖縄県でもあまり知られていない。なぜか、人びとはこの事件について語ることをはばかる雰囲気がある。あらまは次のとおりである。戦時中、沖縄本島の本部半島の山中の伊豆味小学校の校長が、なぜか沖縄県のさる場所の地形図一葉を

所有していたことが唐突にも日本軍によって発覚されたという。柏書房の「解題」清水靖夫による「沖縄県の地形図について」によれば1/5万地形図の一部は一般にも購入できたことが記されている。当の校長がいつどこでその地形図を入手したかは全く未詳である。しかし、その地形図が露見したのは唯一の陸上戦が進行中の沖縄本島であったことである。このような緊張し混乱した状況下で校長はスパイ罪に問われて、即殺害されたのである。

以上のことから、いわゆる戦前に作製発行された沖縄県の地形図の現物を、手にとって観た者は沖縄ではかなり少数であるらしい。それ故、多くの人びとにとってそれは「幻の地形図」といえなくもない。ここで、筆者がこの幻の地形図と遭遇したことを記しておこう。極めて個人的で身近な体験である。それに場所も日本ではなくアメリカ合衆国においてである。留学時代のメモが散逸して正確に記することはできないが、1964年、フロリダ大学（ゲインズビル市）の地理学教室の主任教授が図書館が沖縄の地形図らしきものを入手した情報を伝えてくれた。沖縄戦で衛生兵として参戦した経験のあった主任教授と二人で図書館を訪れた。アメリカの大学ではワンフロアのかんりのスペースは大小さまざまな地図用キャビネットが占領している。当時、沖縄から最も遠いアメリカの大学に沖縄の地形図が保管されていることに驚きかつ不思議でならなかった。その地図にはまだ整理手続がされておらず、事務室近くのキャビネットに保管されていた。「この地図はさる筋の方から寄贈を受けたものである」と司書嬢は説明しながら地形図を見せてくれた。まさしく沖縄の地形図であった。それは2万5分の1の地形図のセットであったと思う。生まれて初めて正真正銘の現物を手に触れてみる機会を与えられた瞬間であった。図幅数は10数葉であったという記憶しかない。しかし、地形図の裏面には関東軍の「球部隊」のゴム印が捺印されていたのは今でも鮮明に記憶に残っている。

太平洋大戦中、米軍は陸地測量部作製の地形図をベ

ースマップにし独自の地形図をつくり、空爆、上陸作戦を実施している。文献資料によれば米軍は1/5万地形図と1/2.5万地形図を発行したという。しかし、1/5万地形図については現物図幅を確認していない。米軍は日本の地形図に方言の地名を記入し、海域海岸の水深地形地質、魚垣などの人工構築物の有無、魚介類や海藻・草の分布をことこまかく調査し地図を作製したという。その場合、上陸予定の糸満市から知念村にまたがる海岸と海域と北谷町から読谷村にまたがる海域と海岸についての調査はそれぞれ地域出身の移民を聞き取り調査対象に行ったという。かつて琉球大学教授であった太田昌秀名誉教授から教示を受けた情報である。

同様の情報は、米須興文著『マルスの原からパルナッソスへ - 英文学の高峰に挑んだ沖縄少年』2004年、影書房)にもみえる。少し長い引用になるが記すことにする。

…、更に太平洋戦争の全局面において、日本軍は兵力、補給、情報等への合理的な配慮を怠りました。一方米軍は、作戦において徹底した合理主義を貫くことはもちろん、作戦発起前の段階でも周到、かつ合理的な準備を行っていました。私が留学した大学の外国人留学生アドバイザーの教授は、沖縄戦に備えて沖縄本島の地図を作る作業に参加した情報参謀だったのですが、この教授が見せてくれた地図を見て、地名がすべて沖縄口(うちなーぐち)の読み方になっているのに驚嘆しました。沖縄系住民の一世から得た情報なのだそうです。地名に限らず、米軍は沖縄全般について詳細な情報を事前に収集していました。それは、沖縄の産業や人口や教育等の活字情報はもちろん、沖縄移民の接見で得られたきめ細かな情報を含んでいました。たとえば、沖縄の指導者のリスト、本土からの差別状況など、一見戦闘には直接的に役立ちそうにないが、住民の宣撫には大いに威力を発揮する大量の情報でした。(66頁)

米軍作製の1/2.5万地形図の特徴のひとつとして海岸近くの地形表現があげられる。等深線に加え裾礁の分布がこと細かに表現されており、近海の高図としても利用できるように配慮されている。

太平洋戦争敗戦後、日本はGHQの支配下に置かれた

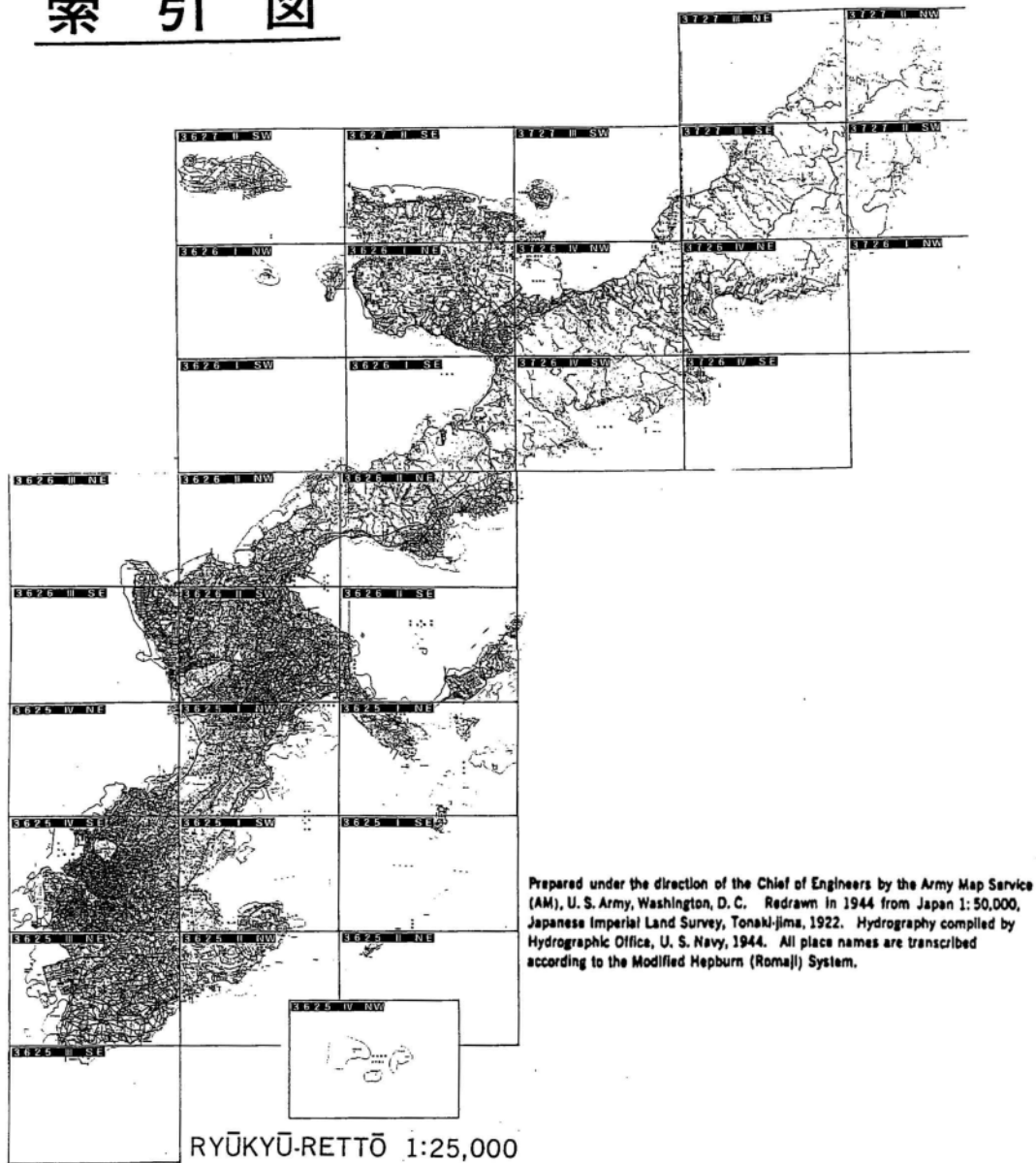
が、沖縄県と奄美諸島は直接管理されたことは、沖縄県域から東アジアの政治情勢にかんがみ、地政学上「太平洋の要石」として軍事的重要性を認識していたことをうかがわせる。中国の共産党支配による政権の樹立とソ連の脅威、さらに朝鮮戦争勃発によりいやがうえにも沖縄県の基地としての重要性が強調された。

米軍基地の恒久的施設の建設を伴い、米軍は沖縄において米軍政府と群島政治の整備を推進し、基地支配の基幹として、警察権は勿論のこと、水資源、道路、電力、金融資本の管理を整備実施した。これに平行して、沖縄県地域の自然環境・資源に加え、民族・地理や産業の諸分野の基礎調査を推進した。ここでは地図にかかわる範囲で述べることにする。米軍はUSGS、農務省、諸大学などの機関の協力のもとに沖縄地域の地質、土壌、生物、鉱物資源などについてかなり精密な調査を実施し、Stratigic Study of the Ryukyu-Rettoのレポートを10冊余にまとめて出版している。その一例として手元にあるMILITARY GEOLOGY OF OKINAWA-JIMA, RYUKYU-RETT0,1959 を挙げておこう。

基地使用において必要な情報は、地図であることを多言を用しないであろう。日本の陸軍が地形図作製を担当したことはよく知られている。故に、精度の高いより地形図の作製は基地建設と沖縄統治のための基本的条件整備であったといえる。1/2.5万地形図は米軍が必要に応じて改訂したかについてはそれを確認する情報を持ち合わせていない。今のところ、手元にある地形図には米軍基地の分布も克明に表現されていることを記しておく(付図1参照)。だが、米軍はより大きい縮尺の地形図の作製を自らの情報に基づいて行った。それは我々にはなじまない4,800分の1の地形図である。それは等高線5フィートに原因しているからであろう。

多色刷の地形図は読んでみると興味にみちた情報を提供する。建造物は黒色で統一して表現している。特に基地の建造物については文章を添えて説明を加えている。つまり基地中心の地形図造りを素直に表現している。一般住民の集落、居住地と基地の境界を示す記号はかなり不明である。農業工土地利用においては何故か日本の凡例を使用して水田地域が表現されている。この地形図作製に使用された航空写真は1947年から1948年に撮影されたものである。当時、沖縄本島は陸

# 索引図



Prepared by the 64th Engineer Base Topographic Battalion, Corps of Engineers, U.S. Army, Far East Command. Compiled in 1951 by photogrammetric (multiplex) methods. Aerial photography dated Jan. 1949. Horizontal and vertical control established by the Japanese Imperial Land Survey, 1927; recovered and extended by CE, U.S. Army, 1948. Coastal hydrography compiled from USHO Charts 0192, 1921; 2338, 1950. Political boundaries delineated from miscellaneous Japanese hydrographic charts, 1944. Map not field checked.

Prepared under the direction of the Engineer, Hq USARJ, by the 29th Engineer Battalion (Base Topographic). Compiled in 1958 from Ryūkyū Rettō 1:25,000, AMS (FEC) 3726 I NW, compiled 1951 (reliability good). Coastal hydrography compiled from USHO Chart 2338, 1950 (reliability good). Planimetric detail revised by photo-planimetric methods from aerial photography October 1957. Horizontal and vertical control established by the Japanese Imperial Land Survey, 1927; recovered and extended by CE, U.S. Army 1948. Names romanized in accordance with the Modified Hepburn System. Map field checked 1958.

付図1. 索引図 出典:都市科学研究所、那覇

上戦で灰じんの状態から脱却して外地から引揚げてくる人びとの流入し、その上多くの農地が米軍基地に無条件に使用され、食糧増産運動のためかつての天水田が再度水田として利用されている状況を如実に記録している。畑地については凡例がまったくない。

ビルトアップされた場所については赤線で主要道路

を記入し、復帰時まで使用された道路番号が既に付記されている。例えばHigh Way 1は現在の国道58号、No.13は国道329号のように。H.W.1は道路を拡幅し、いとも簡単な排水溝をほどこし、道路の両脇にはしばらくの間、電柱は設置されず、かなり広い道路が目立つ空間をつくっていた。一時期、米軍は平坦な道

路を緊急用滑走路として使用する意図により道路建設を行ったという。このように、道路は米軍基地利用の立場から、土地所有者の同意など関係なく可能な限り直線化し拡幅して建設された。そして、復帰後は米軍が建設した道路を整備して今に至っている。

建造物が広がる空間では、米軍基地の施設が道路と同様に建設され、その大きな空間は特に嘉手納以南の地域に目立って分布している。一方、基地として利用されていない場所では、そのまま空襲・艦砲射撃・地上戦によって灰燼に帰し、わずかに破壊からまぬがれた人家と畜舎が点在する集落の状況が見られる。その典型的な事例として糸満市の摩文仁、米須一帯の農村の風景があげられる。

那覇市域は敗戦直後は米軍の物資集積地とし利用され帰郷は禁止されていた。あまつさえ、嘉手納空港地域から宜野湾・浦添・那覇・小禄・豊見城などの地域において、基地ハウジング建設のため多くの集落が消滅した。この大縮尺の地形図を読んでいると、そのまま沖縄の戦後史の一編が鮮明にみえてくるが、ここでまとめておきたい。

付図2は4800分の1地形図の図幅配置図である。地図は米軍が1947年に空撮した航空写真に基づき独自の手法で作製した地図である。図幅数は218枚である。その範囲は石川地峡以南の沖縄本島をカバーしている。偶然にも陸地測量部が作製した1/2.5万地形図の範囲にほぼ一致する。地図作製は各図幅の注に記されているようにGHQの指揮のもとに行われ、その大半は1949年に完成している。筆者は1966-1967年にかけて当時キャンプ桑江(米軍名称キャンプレスター)にあった米陸軍工兵隊(DE)事務所を訪れ、地図の収集を試みたことがある。赤嶺教授の許可のもと学生を伴い手書きでトレシングペーパーを使用して地質図、土壌図などの複写を行った。その際、2階建ての空間を有する倉庫のような大きな建物の中で粗雑な木製の箱棚に保管されている4,800分の1地形図の一部を見せて貰ったことがあった。後日、ワンセットを提供しようと担当官からの口約束をしながら、非常勤講師の立場上、その実現はかなえられず終わった。

筆者が二度目の米国留学のハワイ大学から帰郷したのは、沖縄の日本復帰の翌年の1973年の3月であった。既に定年退官された赤嶺先生は米軍からの連絡を受け

工兵隊に出かけ米軍が提供してくれた4800分の1地形をピックアップ一台分を貰い受けてきたという。その成果はモザイクにして3本の掛地図にまとめられていた。後日談だが、大量に放出されたこの地形図の紙は那覇市の公設市場で鮮魚や生肉などの包み紙として使用されていたという。

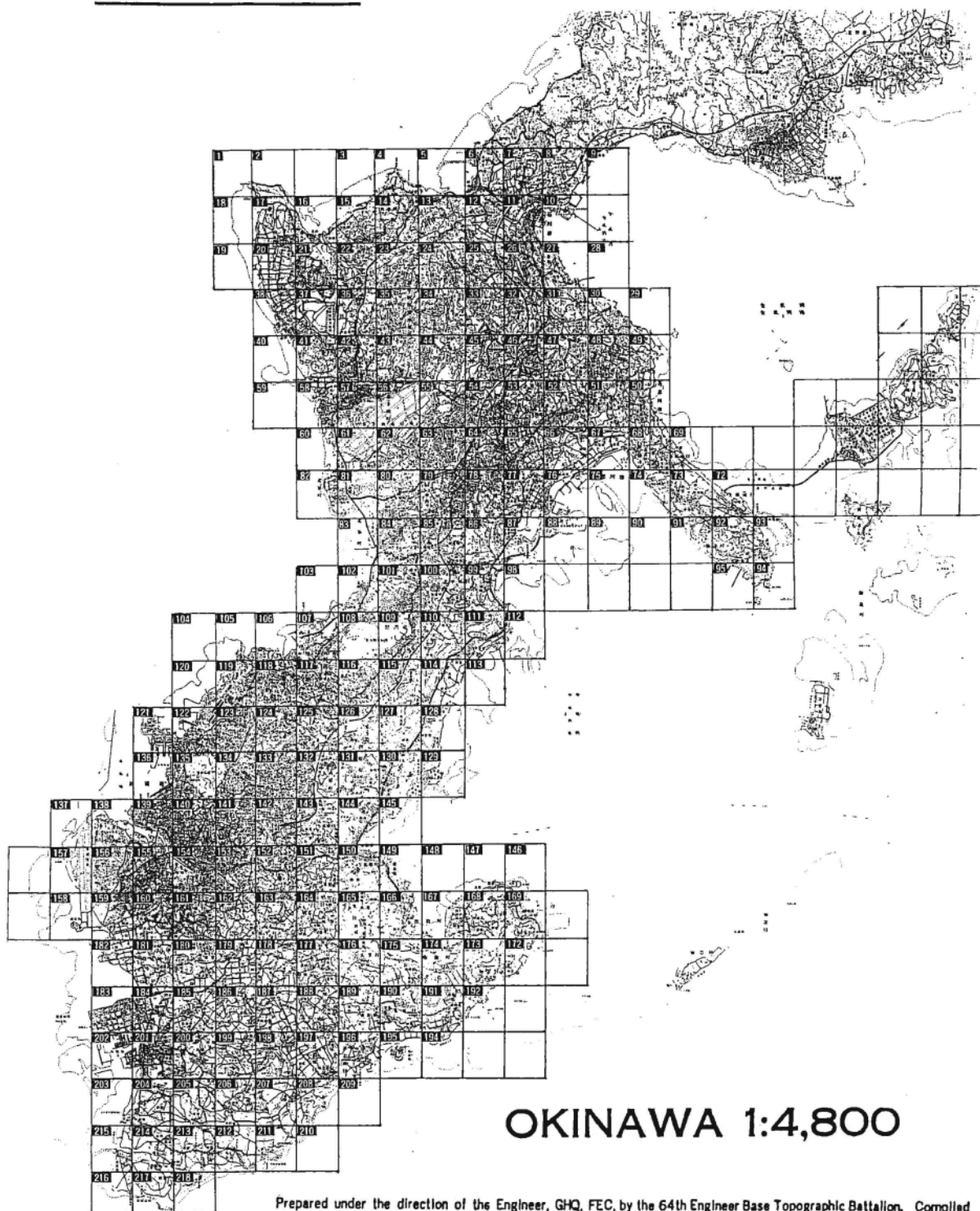
米軍による沖縄の軍事的統治は、1945年6月の沖縄における日本軍の降伏後しばらくは海軍によって掌握されていたが、やがてその統治管轄は陸軍に移り、1972年の沖縄の日本復帰を契機に海兵隊に移譲され現在にいたっている。筆者は1973年からしばらくキャンプ端慶覧(Camp Foster)にあった海兵隊の不動産管理事務所を訪れ地図に関する資料収集を行った。雑多な地図の提供を受けたが、その中に4800分の1の地形図が作製途中で放置された地形図があった。つまり、1952年の日米講和条約が決定した頃に、沖縄本島の北部から奄美大島の部分は作製を中止した形跡がうかがえた。しかしながら米軍は、これまでに公表した石川地峡以南の218枚の図幅の他に、既存の基地が位置する地域については4800分の1の地形図を作製していたらしい。つまり、沖縄本島石川地峡以北のキャンプ・ハンセン、キャンプ・シュワブ、八重岳通信所(本部半島)、北部訓練場、伊江島補助飛行場などが位置する地域については虫食い状態だが同スケールの地形図が作製されている可能性が高い。筆者は1975年、名護市役所久志支所でキャンプ・シュワブをカバーする地形図数枚を確認したがその詳細は残念ながらメモ帳が見つからない。いつの間にか、沖縄の米軍基地における地図などの情報収集のアクセスは、防衛庁施設事務局が立ちほだかりほとんど不可能な状態に至っている。

#### 参考文献

島袋伸三「沖縄の地形図」『南島の地名』第3集、1988、78～87頁

清水靖夫、浅井辰郎、小林茂、安里進『大正・昭和琉球諸島地形図集成』解題、柏書房、1999、47p.

# 索引图



付图2. 索引图 出典: 都市科学研究所, 那霸